

博士学位論文審査結果の要旨

学位申請者氏名

阿部 亜紀

論文題目

白瀧幾之助の生涯と芸術
—近代日本洋画における技法と画題の展開—

論文審査担当者

主 査 前崎 信也

㊞

審査委員 成実 弘至

㊞

審査委員 廣田 孝

㊞

本論文は近代に活躍した洋画家 白瀧幾之助（1873-1960）の研究である。2022年12月21日に口頭試問を行い、2023年1月23日に家政学研究科で博士論文公開審査会を行なった。以下に論文審査結果の要旨を述べる。

白瀧は兵庫県朝来市生野町に生まれ、山本芳翠（1850-1906）や黒田清輝（1866-1924）に師事した。代表作としては東京美術学校の卒業制作《稽古》（東京藝術大学大学美術館所蔵）が知られる。卒業後は欧米諸国で約7年間の留学生活を経験し、1913年の第3回東京勸業博覧会で《百合の花》が三等賞、第8回文展で二等賞を受賞し、その後は官展を中心に審査員を務めるなど活動した。また、1952年には洋画界に尽力した功績を讃えられ「日本芸術院恩賜賞」を受賞するなど、明治期から昭和期という近代洋画の黎明期に活躍した洋画家である。

美術史上においては一部の有名画家を除き、白瀧をはじめとする近代の洋画家に関する研究は進んでいるとは言えない。白瀧の研究も同様で、彼の画業に関する先行研究として知られるのは、2010年に姫路市立美術館で開催された「白瀧幾之助—没後50年—」展のみであり、本格的な研究としては本論文が初のものとなる。本論では先述の展覧会の成果を参考にした上で、新出の作品や資料、親族への聞き取り、同時代の芸術家たちとの交流の精査を行い、白瀧幾之助の芸術の成立と展開を極めて詳細に明らかにすることに成功している。これまでは青年期の業績によって風俗画家として捉えられていた白瀧であったが、本論では白瀧が水彩画やテンペラ画のような油画以外の西洋画技法の日本での普及に果たした役割の大きさを示している。

以下、各章の内容を解説する。

第1章では、白瀧幾之助の生涯や交友関係から、近代の洋画家の活動の場について詳述している。白瀧は画学生時代、黒田清輝に師事し、天真道場時代には岡田三郎助（1869-1939）、藤島武二（1867-1943）らと机を並べた。その際、陰影部分に青や紫を用いる技法を学び得たことから、紫派や新派の画家として知られている。しかし、彼の画業は外光的な制作に留まらず、肖像画や活人画の制作にも携わり、1913年には日本水彩画会を立ち上げ、1928年には日本テンペラ画会に参加するなど、その取り組みは多岐にわたっていた。本章では、こういった多様な活動において、洋画家だけではなく、日本画家・建築家・実業家など幅広い交友関係を築いていたこととの関連性について指摘している。第2章では第1章に関連し、白瀧の関わっていた芸術サークルの中から、画家以外との関係について解説する。永井荷風（1879-1959）と三井高精（1881-1970）を例に挙げて解

説し、白瀧のあまり知られていない交友関係と画業への影響について明らかにしている。

第3章では、2018年に京都女子大学前崎研究室の所蔵となった「白瀧幾之助写真資料」（以下、写真資料）についての研究である。本資料は、実際に白瀧が旧蔵していたと考えられる約1,500点もの写真だが、これらを精査・研究することで文献資料では知り得なかった白瀧の交友関係や作品の制作背景までも明らかとなった。本章では、資料が現在の所有者の手に渡るまでの経緯を確認するとともに、内容の整理を行った結果を報告している。この資料には白瀧と関係のあった多くの芸術家・著名人の写真が含まれており、近代美術史研究に資することが期待できる。

第4章では、5節に分けて白瀧の作品研究をおこなっている。第1節では、白瀧の肖像画家としての側面に注目した。前述の写真資料を精査することにより、これまでモデルが知られていなかった《婦人像》が藤村男爵夫人であると特定するなどの成果を上げている。第2節では、代表作《稽古》の制作背景として重要な白瀧と磯谷商店を経営する長尾家との関わりについて精査している。第3節では白瀧作の《ペチュニア》と《鶏頭》のモデルが、株式会社サカタのタネの創業者・坂田武雄が開発した新品種の花が描かれた可能性を明らかにした。第4節では、1913年開催の第7回文展に出品した神話画《羽衣》を取り上げ、ジョン・コンスタブルによる《エルムの樹》（V&A所蔵）との関係性を指摘した。第5節では白瀧が1920年頃に描いた《金魚と子供》に注目し、構図の検討に写真を用いて描いたことや、花に花言葉の意味を寓意していた可能性を提示し、近代における構図や意味の扱われ方の変化について言及している。

第5章では、白瀧の水彩画家およびテンペラ画家としての業績について2節に分けて考察している。第1節では日本における水彩画の普及と白瀧との関係について取り上げている。当時、水彩画の評価は油彩画と比較して一段低いものとされていた中で、白瀧は水彩画の普及に尽力し「日本水彩画会」を創設した。第2節では、白瀧と「日本テンペラ画会」との関係について考察している。テンペラ画会は1928年に白瀧や平沢貞通、岡田三郎助らを主要メンバーに創設された団体だった。しかし、同会についての資料は乏しく、白瀧との関係についてもこれまで等閑されてきたため、関連する文献資料を精査しその実態について検討している。

以上のように本論は明治期から大正期を中心に美術史や美術運動史に働き、貢献を続けた白瀧幾之助の活動を基盤としながら、日本の近代洋画における技法や画題の展開について明らかにしている。油彩はもちろん水彩、テンペラの日本への普及の中心にいた彼は、日本洋画史上で特筆すべき人物であり、「白瀧幾之助写真資料」を含む多方面から考察することは、日本の洋画史そのものの再考にも繋がるものである。

本研究において白瀧幾之助の生涯と芸術を詳述し、彼が画家として主に20世紀前半の日本洋画史の発展・改革に果たした役割を明らかにしたことは、近代美術史に資する点が大きいと判断できる。これらのことを総合的に判断した結果、本論文の内容は高く評価されるという結論に達した。よって審査員一同は、本論文が京都女子大学大学院家政学研究科博士（学術）の学位論文として十分な内容を有しており、価値あるものと認めた。